

序 章

第1節 本書の目的

「中世」と聞くとどのようなことをイメージするだろうか。荘園制が普及し、鎌倉幕府が成立する。守護・地頭が設置され、武士が活躍する。南北朝期の内乱を経て室町幕府が成立し、応仁文明の乱の後、戦国大名が群雄割拠する時代が到来する。一般的には、おおよそこのようなものではないと思われる。

だが、中世を通じて、わが国の社会が武士のみで構成されていたわけではない。一般の村落や港町があり、そこには農民・漁民・商人・僧侶など多様な人々が存在した。このような人々の情景は、絵画や絵巻物によって見て取れるであろうし、文献史料や考古資料から想像することもできるだろう。これらの史資料を活用して、現在では文献史学や考古学、地理学、美術史的観点など、多角的な視点から研究がなされている。その内容は多岐におよび、土器・陶磁器等を用いた流通研究や、仏教や習俗、武士の形成、城郭などをテーマとする研究など、中世史研究は一層多様化している。

しかし、文献や絵画史料の量には地域差があり、なかにはそれらの記録が極端に乏しい地域も存在する。そのような地域では、歴史像の構築にあたり、考古学への依存度が高まる傾向にある。本論の研究フィールドである九州西北地域もその1つであり、11世紀から13世紀頃までの文献史料が極めて限られている。また、考古資料も遺構の少なさなどの制約があり、九州西北地域における中世前期の在地社会像は、断片的な復元にとどまってきた。

だが、近年の発掘調査によって、九州西北地域における中世前期の考古資料が増加してきた。これらの考古資料を用いた従来の研究成果の再検討、および地域社会の構造に特化した分析によって、文献史料が限られた地域においても社会像の具体化が可能になると考えられる。考古学的手法で中世前期の在地社会像をどれだけ復元できるか。これが本書の狙いである。

九州西北地域は、現在の長崎県域とほぼ一致する範囲を指す。この地域は、九州本土部に位置する松浦地域・大村湾沿岸地域・島原半島と壱岐・対馬・五島をはじめとする数百の島からなり、これらを構成する土地の海岸線長は北海道に次ぐ2位である。このことは、九州西北地域の土地の多くが海に面していることを意味している。

九州西北地域が面する海には、東アジア海域や玄界灘といった外海と大村湾や有明海といった内海あるいはやや奥まった海の2種類が存在する。この海の性質は、九州西北地域が古くから他国との密接な関係を形成した要因である。九州西北地域は、わが国のなかで朝鮮半島に最も近い位置にある。各時代を通じて、中国大陸や朝鮮半島からわが国に向かう人々の多くは、大宰府・博多の所在する九州北部地域を第一の目的地とした。中国大陸から朝鮮半島を経由するルートを用いてわが国に向けて出発すると、まず対馬海峡を連絡口として対馬・壱岐といった島嶼へ至る。島嶼からさらに南下すると、

九州西北地域に到達する。必然的に、九州西北地域は中国大陸・朝鮮半島と九州北部地域を結ぶルート¹⁾の経由地になったのである。

また、九州西北地域は中国大陸・朝鮮半島と九州北部地域を結ぶルートだけでなく、九州北部地域と琉球列島を結ぶ航路上にも位置していた。琉球列島の特徴的な交易品には螺鈿細工の材料となる南海産巻貝や、硫黄、赤木といったものがあり、これらを求めて九州北部地域と琉球列島で交易船の活発な往来があったことが知られている(山内2009, 山里2012など)。11世紀後半になると、博多では住蕃貿易(亀井1986)が開始され、中世前期の東アジア交易が活発化する。これによって、博多では「白磁の洪水」とも呼ばれるほど、前代と比較にならない量の貿易陶磁がわが国に運ばれた。

中世前期の東アジア交易を担った博多の商人は、商品を求めて東アジア海域を活発に往来した。博多の商人が琉球列島へ交易に向かう際に用いた主要な航路は、九州西岸を伝いながら南下するルートであった。九州北部地域と琉球列島を結ぶこのルートは、南海産の貝交易のため弥生時代以来、頻繁に用いられたように(木下1996)、古代以前から存在する航路である。この航路の利用は中世においても継続する。したがって、九州西北地域は博多と琉球列島を結ぶ航路上の経由地にもなったのである。

古代の航海技術では、現代のように出発港から目的港まで一気に渡ることは困難である。風雨を凌ぎ、波を見る必要があり、航路上の各所に点在する港に寄船をしながら航海するのが常であった。このため、九州西北地域には多くの船の往来があっただろう。

このように、複数の航路が九州西北地域で交差する状況を、宮崎貴夫氏は「結節点」と呼称した。そして、「結節点」の主たる特徴として、九州西北地域の遺跡から普遍的に出土する貿易陶磁を挙げている(宮崎1994)。しかし、宮崎氏によって九州西北地域が「結節点」と評価されて以来約30年が経過したが、現在においても当該地域は「結節点」という表層的な解釈から進展がない。

九州西北地域の考古学的研究では、考古学的事象の解釈の多くを航路の「結節点」という特異な地理的特徴に直結させ、歴史叙述を行うことが多い。しかし「結節点」とは、地理的な環境を背景として生み出された状況に過ぎない。この用語自体は、九州西北地域の特徴を的確に指摘したものであるが、結節点はわが国の様々な地域に確認できる。したがって、「結節点」という用語は、九州西北地域の特徴でこそあれ、そのような交易活動を可能にした社会的な基盤、特に在地社会の構造や経済活動の実態を具体的に明らかにしなければ、九州西北地域の中世社会の実像を明らかにすることはできない。例えば九州西北地域において、貿易陶磁の器種別組成や入手ルート、交易に関わった階層や勢力、その社会的背景などが、考古資料をもとに述べられた成果はほとんどない。このような状況から脱却するためには、考古資料の適切な分析方法を模索する必要があるのではないだろうか。

また、中世社会の構造を把握する上で、荘園制の展開は不可欠な視点である。律令制の衰退後、11世紀以降に全国的に荘園が増加し、地域社会は公領と荘園が錯綜する複雑な社会構造を形成していった。九州西北地域にも荘園が存在するが(序章第5節)、それらが地域社会において果たした役割、荘園領主・在地の荘官らによる経営や物流の実態、在地領主層の存在といった内実については、詳細が明らかになっていない。

中世の考古学的研究は、時代的な背景や文献史料からの裏付け、資料数の豊富さなどから、博多・大宰府・京都・堺・鎌倉・平泉といった地域がけん引してきた。対して、九州西北地域のように遺構・遺物や文献が乏しい地方は、中央や都市部との相対的關係から歴史的な評価が行われてきたとって

も過言ではない。

このほかにも課題は多い。その1つが年代論であって、九州西北地域における中世の成立時期が考古資料に基づき具体的に議論されたことは少ない。中世の成立については諸説あるものの、考古学的な指標の1つに中世的土器様式の成立がある。大宰府一帯では、11世紀中頃に碗・坏・小皿のセットからなる中世的土器様式が成立することが指摘されており(山本1988)、在地土器のセット関係から中世の成立過程を検討する余地がある。しかし、九州西北地域では在地土器編年が確立していなかったため、在地土器から中世の成立過程について論じられたことはなかった。

以上のような状況は、地方の中世社会像や荘園経済の構造解明だけでなく、わが国全体の中世成立期を検討する上でも大きな問題である。中心地の研究が進む現在では、地方独自の歴史的な展開を検証し、それらを様々な地域の成果と結びつけることによって、重層的な中世社会像を復元することが求められているといえよう。

以上を踏まえ、本書は11世紀から13世紀における九州西北地域を対象とした考古学的分析によって、当該地域の中世社会の形成過程や中世前期の東アジア交易との関係を明らかにし、西日本中世史あるいは東アジア海域史に九州西北地域を位置づけることを目的とする。

第2節 本書の構成

これまでの九州西北地域の考古学的研究は、貿易陶磁が多く出土するという状況証拠に依拠し、その分析が中心であった。しかし、その結論の多くは、九州西北地域が複数の航路上の「結節点」にあるということに帰結しており、表層的理解に留まっていた。本書は、遺物の型式学的分析と数量分析、遺構に基づく分析という重層的かつ実証的な研究手法によって、この状況を脱却する。そのため本書は以下の構成とした。

序章では、まず時期区分や地理区分を整理する。そして、分析の中心となる大村湾沿岸地域の地理的特徴を述べ、九州西北地域の歴史的な動向を概括する。分析対象となる時期の交易の実態については、文献史学と考古学の両面から研究史を整理する。さらに、九州西北地域の主要な中世遺跡をまとめることで、分析地域の全体的な枠組みを示す。

第1章では、中世考古学の研究史を整理し、当該分野がどのような研究方法を用いて社会像の復元を進めてきたかを把握する。そして、研究史上で用いられてきた分析方法をもとに、九州西北地域における中世前期の在地社会像の復元に適切な研究方法を検討し、提示する。

第2章から第5章は、研究史上から導かれた研究方法を用いて、遺物の個別分析を実施する。

まず第2章では、大村市竹松遺跡から出土した土師器を対象とする型式学的分析によって、地域共通の時間軸を設定し、時期ごとの食器組成の特徴を抽出する。また、設定した土師器の分類や年代観を用いて、島嶼域の土師器についても分析を実施する。

第3章では、九州西北地域から出土した瓦器を対象として、型式学的分析を実施する。これによって、瓦器碗の型式の分布範囲や型式変化、地域性を抽出する。

第4章では滑石製石鍋の分析を実施する。滑石製石鍋の数量比較や流通状況の分析結果を、九州西北地域内で比較することで、滑石製石鍋の生産・経済活動と九州西北地域のかかわりについて検証す